

二〇二四年度

二月三日午後入試

# 国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんには、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、5-1 から 5-13 まであります。

一 次のⅠ・Ⅱ・Ⅲの文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、Ⅰ・Ⅱは同じ作者による自分自身の体験をもとにして書かれた自伝的作品であり、共に主人公の父の死にかかわる場面をえがいた部分です。Ⅲも同じ筆者による父の死にまつわる思い出を記した部分です。また、問十五には会話文がふくまれています。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

I

姉が大妻女子大に合格し、兄の亨一が高校一年になり、わたしが小学校六年になったばかりの春に、突然父が死にました。

父は冬の間中、夜が更けると、ぐおんぐおんと腹のずっと底の方から無理やりくじり出すような重くて苦しそうな咳をしておりましたが、春になって、なんとなくふつと気持ちも体もゆるんでしまうような、あたたかい風が吹いてきた日に、父はわずかにいくつかの、最後のあえぐような呼吸をして、息をひきとったのです。

父が息を引きとるのを、わたしは母の叫び声で知りました。その時わたしはちょうど兄と二人で茶の間にいたので、ほとんど二人で同時に父の寝間に飛びこみました。

「おとうさんが、おとうさんが！」

と、母は二燭の暗いあかりの中で、眼だけを青く光らせて、わたしと兄の顔を見ました。母の抱く両手の中で、父はそこからみてもあきらかにただごとでない姿だとわかるように不自然に首をのけぞらせ、喉のあたりからぐつぐつと土鍋の煮えたぎるような音をひくひくくたてていました。

② それを見た兄の亨一が飛び跳ねるようにして父の寝間を出ていくのをわたしはわけもわからずあわてて追っていきました。

兄は、父の寝間からまっすぐに玄関にむかい、そこから裸足のまま外にとび出しました。その日は生憎長兄がまだ帰っておらず、わたしはどうしていいかわからず、そのまま亨一と同じように裸足で外にとびだして、あとを追いました。夕方になったばかりの春先の、なんだかほやけたような薄闇があたりを広がるうとしている頃でした。

亨一は凄じい早さで家の前の小路を走っていました。わたしは全速力で亨一のあとを追うことも、かといって一人で家に戻ることもできず、途方にくれながら、とりあえず亨一の走っていく後を追っていきました。

やがて亨一が夢中で走っていく先が、家から歩いて五分ほどのところにある父のかかりつけの医者の家だ、ということがわかりました。わたしは大きく兄に遅れて走りながら、そうやって追っていてもたいして意味のないことだ、と思いましたが、しかしとりあえずいま自分のやることは兄を追っていくしかないのだらう、とむなしく考えておりました。

その医者へ行くには麦畑の間の細い道を通って切っていくのが一番早いのですが、わたしがその細道の半分ほど行ったあたりで、兄が黒い鞆を両手にかかえて引き返してくるのに出会いました。兄のすぐうしろに太った女医が左右に揺らぐような、いやにぎこちない動きで畑の間の道を行くのが見えました。しかし太った女医は走るのが苦手なようで、両方の腕をこちょこちょとせわしなく左右に激しく揺りあげてはいるのですが、体の方はまったく普段歩いているのと同じようなスピードなのです。

兄の亨一とわたしに挟まれるようにして家の門のところまでやってきたとき、それでも太った女医は首の

あたりに大汗をかき、荒い息を吐いていました。③ 玄関をあがるときに、太った女医の顔が今まで見たこともないほど白く固く緊張しているのがわかりました。

父が完全に息を引きとったということがわかったとき、亨一は下を向いたままわたしの横を通りぬけ、便所に行きました。母は紙のような白い顔になって、太った女医に、父の息を引きとるときの様子を話し、わたしはまたそこで何をしていいのかわからず黙って立っておりました。

「でもいいんです。あたしが最後に口うつしで死に水をとらせることができたから、いいんです。」

母がそのときそのようなことを言っているのを、わたしはもの凄く不思議な気持ちで聞いていました。そしてそのことの意味をわたしはそれから十数年たった後に、やっと分るようになるのですが、その時はとにかく自分はいま何をすべきなのか、そのことばかり考えていました。しかしわたしの役目は自分では何もわからず、母もわたしや弟のことは殆ど目に入らないようでした。

母は亨一の名を呼んでいました。太った女医にとにかくできるだけ早く親類知己の者にこのことを知らせるように、と言われたのです。

亨一はずっと便所に入ったまま出てこないのを知っていたので、わたしは母にそう言いました。母は名を呼んでも出てこないのので便所の戸を叩き、強い調子でまた何度も亨一の名を呼びました。

④ 亨一はひどくぶつきらぼうに、そして乱暴に便所から出てきました。⑤ 亨一の顔が、くしゃりと歪み、両目がすっかり赤くなっているのを、そのときわたしは素早く知りました。

父の葬儀の日にわたしは不思議な二人の大人のの前でぎこちない挨拶をしました。挨拶といっても、名前を言われてペコリと頭を下げるだけなのですが、わたしはその人々を最初から変にどぎまぎした気持ちで見えたのです。

わたしを見おろす二人の男は、二人とも長兄の目にそっくりでした。とくに歳かさの長身の男は、長兄と同じような丸い眼鏡をかけ、いくらか早口で話すところもよく似ていました。その日も春にしてはいやに湿ってなままたかい風が吹いていました。そのなままたかい風の中で、わたしはなにかかなしく危うい、一族の中の秘密めいたものを、するどく垣間みたような気がしました。

(椎名誠『犬の系譜』より)

※(注) 兄の亨一 すぐ上の兄のこと。その上にもう一人「長兄」と呼ばれる兄がいる。

くじり出す へぐって中から物を取り出す。

二燭 二つ灯っている室内の照明。

死に水 死にぎわの人の口をしめらす水。父が死ぬ直前まで「わたし」の母が看病をしていたことを示す。

親類知己 血のつながりのある人や知り合い。

垣間みた 「垣間みる」はちらっと見る。

秋がすぎ、冬になると父はもう布団から起きることもなくなり、ぼくや弟は家にいるときは大きな声をだしてはいけない、と言われていた。

父の病気は当初重い「肺炎」と聞かされていたが、それだけではなくおおもとは結核のようだった。それは下の子供たちには知らされていなかった。本格的な冬に入ってから嫌な響きのする咳が続き、苦しそうだった。子供心にも父は重い病気にかかってしまっているのだ、ということがわかってきていた。

一月の十五日に父は死んだ。いつも枕元に置いておく湯ざましを取り替えて台所に行って戻ってきたらもう意識がなかった、と母は涙をこぼし畳に両手をこすりつけながら何度も同じことを言った。

思いだしてみると父がぼくを連れて船橋の魚市場にガザミを買いにいった頃は、父が力をふりしぼって普通の生活をしようとしている最後の頃だったのだろう。

あるとき、とくに家の料理でガザミを必要としていなかったように思うし、一緒に連れていったのがなぜぼくだったのか今にいたるまで結局理由はわからないままだ。

単なる「きまぐれ」だったのか、ふだんあまり二人きりで話をしたことがないことに気がついてお供に連れていってくれたのか、そのときの父の真意はわからない。会話といたって父はろくすっぽぼくの顔も見ずにとさおり思いだしたように「蟹をたべなさい。」としか言わなかったのだから。

父の葬儀は自宅で行われた。

寒い日だった。関東は真冬になってもめつたに雪は降らない。曇天で、風はなくそのほうが体の芯まで冷えそうな「冷たい」日になった。

家のなかではいろんな人が慌てふためいていたし、早くに訃報を聞いた弔問客がせわしなく出入りし、ぼくや弟はとくに何をしていいのかわからずさして広くない家のあちこちを目的もなく動き回っていた。

みんな黒い服や着物を着ていた。今のように家の中全体を暖めるような暖房装置はなく、ところどころに火鉢があつてその中で赤い炭がときどきパチパチいつてはじけている程度だった。

家出していたすぐ上の兄も帰ってきた。仰臥している父の前にひざまずき、親不孝をしました、と言って涙をいっぺんに沢山流している横顔を見た。人間があんなに両目から沢山の涙を流せるのか、ということにぼくは驚いてしまった。

母はそれまでの看病で憔悴しきっていたのだろうが、そこまで注意深く母を見ていたわけではなく、小学校五年のぼくには普段との違いがよくわからなかった。もっぱら母のそばにつきっきりで世話をしていたのは姉だった。ぼくは兄のお下りの黒い学生服を着ていた。そんなときそれしか着る服がなかったのだ。子供なのに、家の中なのに居場所がなく、とにかく寒かった。

弔問客がひっきりなしにやってきはじめて。父の跡を継ぐことになる長兄と驚くほどよく似ている人が三人やってきて目をひいた。三人とも背が高くはじめて目にする顔だった。年齢はあきらかに長兄よりそれぞれいくらかずつ上で三人は兄弟のようだった。いや長兄をいれると四人の兄弟そのものだった。

どうしてぼくの長兄とあんなに似ているのだろうか、というのが子供心にも不思議だった。一番上と思われる人がぼくのそばにきて「そうか君がこっちの三男か。」と言ったのをよく覚えている。「こっち」ってなんなのだろう、と思ったが意味がうまくつかめず答えも質問もできなかった。

それ以外にも何か言っていたのだろうが、そのひとことだけが鮮明だった。ぼくは緊張して、その背

の高い人に問われるまま何ごとか答えていたのだろうけれど、理由のわからない居ごこちの悪さがあった。<sup>⑪</sup> 多くの家は子供は知らないほうがいい何かと秘密めいた事柄の多いところなのだ、ということを感じていたので、そのひとことがそんなことの記憶の澱みたになっていった気もする。

それからいろんな親族や知り合いが出入りし、家のなかは騒々しいわりにどこか常に空気が硬直していた。<sup>⑫</sup> 硬直していた最大の原因は二人の年配女性の弔問客がもたらしたものだ。

二人とも喪服姿で緊迫した顔つきをしていた。多くの母よりもだいたいぶ歳は上のようで、迎えの者が型通りの挨拶をしても、その人たちは身振りや丁寧に応えるだけで何も言わなかった。

なんだかよくわからなかったけれど、家の中はその二人の弔問客によってにわかにはピンとした緊張の糸が張られていくような気がした。

(椎名誠『家族のあしあと』より)

※(注) ガザミ——ワタリガニ科のカニ。

訃報——人が亡くなったという知らせ。

弔問客——「弔問」は亡くなった人の家をたずねておくやみを述べること。「弔問客」はその人。

仰臥——あおむけに床に横たわっていること。

憔悴——やつれ、やせおとろえること。

澱——液体の底に沈んでいるかす。ここはたとえて用いている。

### III

まず自分はこれまでどのくらい「人の死」に直面してきたのか、ということについて考える必要がある。

いまだ記憶に鮮明なのは「父の死」である。ぼくは十二歳だった。小学校六年である。

※<sup>⑬</sup>父は公認会計士の仕事をしていた。ぼくは東京の世田谷区三軒茶屋の生まれ。その頃まで父は元気に働いていたが、なにか大きな事件に巻き込まれ、世田谷の五百坪の土地と家を失い、千葉県の幕張に流れた。父はそのまま寝込み、五年後に死んだ。なにかと謎の多い家で、父の死によって自分には異母兄弟が沢山いる、ということを知った。二人の母のもとに生まれた兄弟は必ずしもそれぞれの母のもとで育つ、というわけではなく、いくらか錯綜している。ぼくが長男と思っていた人は先妻の子供であり、その上には一緒に暮らし、たことのない兄や姉がいる。全部で九人いて、ぼくは下から二番目。でもそういうことは父の死からだいぶたってじわじわ知っていったことである。

家族のことについて「ん？」と疑問に思うことがあっても気軽に聞けないような気配、雰囲気というものがある。その家の周囲にあったのだ。

父の葬儀は一月のひどく寒い日に行われた。みぞれの降っているなかで、ぼくは学生服を着て震えていた。「父の死」はそんなに激しく悲しいことではなかった。何故なら父は非常に厳格で無口で、気軽に会話をした記憶がぼくにはないからだ。父が仕事から帰ってくると子供たちは玄関にかしこまってすわり、両手をつけて「おかえりなさい」という習慣になっていた。父は不機嫌そうに帰ってきて、だまって子供らのあいだを通って、自室に入った。

誰がそんなことをさせたのか。あとで知るのだが父ではなく、後妻であるぼくの母がそうさせていたの

だった。父の不機嫌ふきげんさはそんな大仰おおぎようなことが嫌いやだったからなのかもしれない。けれど子供こどもだったぼくは父が好みこのみでやっていることと思おもい、封建ほうけん的てきでやたらに怖いこわ親おや、というふうに思いこんでいた。

ぼくが小学校五年ごねんの頃ころに※トイカメラで撮とった父の写真しやうしんがある。たった一枚まいだ。父は少し体の調子ていしがいいときに廊下ろうかにある籐椅子とういすに座すわって庭にわを見ていることがあった。その後ろ姿すがただ。とても怖こわくて正面しょうめんから撮とることができなかつたのである。

仕事柄しごとがら、葬儀そうぎは立派りつぱで大勢おおぜいの人が参列さんれつした。⑭じゆうきやうぼくのすぐ上の兄あには号泣ごうきしていた。どうしてそんなに悲かなしいのかぼくにはよく分からなかつた。戦争せんそう帰かえりの長兄ちやうけい（異母いぼ兄弟けいだいであり、実際じつじには三男さんなん）が父の仕事しごとを継つぐことになり、神田かんだにある事務所じむしょにそのまま入れ代かわって通とほうようになったが、大学だいがくを出でて間まもない歳としでもあり、貫禄かんろくがあまりにも違ちがうので、父の時代じだいの「お得意おとぎさん」がどんどん離はなれていき、長兄ちやうけいはかなり苦勞くろうしていたようだった。

（椎名誠しいなませじ『ぼくがいま、死しについて思うこと』より）

※（注） 公認会計士こうにんかいけいし 法律はうりつに定められた資格しよくをもち、会社かいしゃなどの財務書類ざいむしゆいの監査かんさ・証明しょうめいを行うことを

職業しごくとする人。

錯綜さくそう 複雑ふくざんに入りまじること。

大仰おおぎよう おおげさなこと。

封建ほうけん的てき 上下じやうげの身分しんぶん・立場たてがみのちがいはつきりさせて、何でも上かみから力ちからずくでおさえよ  
うとする様子ようす。

トイカメラ 子供こどもでもでも写うつせるおもちゃのようなカメラ。

問一 —— 線①「突然父が死にました。」とありますが、父の死を「わたし」は何によって知りましたか。それがわかる一文を [I] の文中からぬき出し、その初めの四字を答えなさい。

問二 —— 線②「それを見た兄の亨一が飛び跳ねるようにして父の寝間を出ていくのをわたしはわけもわからずあわてて追っていきました。」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「兄の亨一が飛び跳ねるようにして父の寝間を出て」いきましたが、「兄の亨一」は何をしに「寝間を出て」いったのですか。解答らん「ため。」につながるように、十字以内で考えて答えなさい。

2 「わたしはわけもわからずあわてて追っていきました。」とありますが、「わたし」の気持ちを説明した次の文章の [ ] A・B・Cにあてはまる言葉を、それぞれ [I] の文中からAは十一字、Bは十二字、Cは四字でぬき出して答えなさい。

わたしは [ ] A [ ] 裸足で外にとびだして兄を追いかけたが、ひどく兄に遅れたので、わたしの行為は、 [ ] B [ ] と思った。けれども、とりあえず兄を追いかけていくことしか今の自分にやることはないのだろうと [ ] C [ ] 考えていた。

問三 —— 線③「玄関をあがるときに、太った女医の顔が今まで見たこともないほど白く固く緊張しているのがわかりました。」とありますが、なぜ「女医の顔」は「今まで見たこともないほど白く固く緊張している」ただと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 父のかかりつけの医師である女医は、家の様子から父の命が危ない状態であることとつさに気づいたから。

イ 女医は走ってきたことでつかれてしまい、さらに初めての家のせいか気持ちひきしまる思いがあったから。

ウ 理由もわからずに走ってきたせいか、女医は気持ちが落ち着かずこの状態で診察ができるか不安だったから。

エ 子どもの急ぐ様子とは関係なく、家の中が明るくにぎやかだったことが女医にとって気味悪く思われたから。

問四 —— 線④「ぶっさらばう」と同じような意味をもつ言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 無遠慮      イ 無作法      ウ 無愛想      エ 無用心

問五 ——— 線⑤ 「亨一の顔が、くしゃりと歪み、両目がすっかり赤くなっている」とありますが、この表現からどのようなことがわかりますか。それを説明した次の文の  にあてはまる言葉を、五字以内で考えて答えなさい。

亨一は便所の中で  ことがわかる。

問六 ——— 線⑥ 「不思議な二人の大人」とありますが、「わたし」はどのような点でこの「二人の大人」を「不思議」だと思っているのですか。解答さんの「だった点。」につながるように、 の文中から十字以上十五字以内でぬき出して答えなさい。

問七 ——— 線⑦ 「嫌な響きのする咳が続き、苦しそうだった。」とありますが、 の文章の中ではこの「嫌な響きのする咳」をどのように表現していますか。それがわかる部分を解答さんの「咳。」につながるように、三十五字以上四十字以内でぬき出し、その初めと終わりの三字を答えなさい。

問八 ——— 線⑧ 「父が力をふりしほって普通の生活をしようとしている最後の頃」とありますが、「力をふりしほって普通の生活を」するとは、「父」のどのような様子について言っていると考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 父はできるなら仕事を変えたいと思っているのだが、家族のために何とか続けようと考ええている様子。

イ 父は貧しさからぬけ出したいと思っているのだが、自分を生かせる仕事がないためになやんでいる様子。

ウ 父は体の状態がよくないのだが、親類や家族に支えられてどうにか生きようとしている様子。

エ 父は病魔におかされつつあったのだが、精いっぱい健康な状態でふるまおうとしている様子。

問九 ——— 線⑨ 「ろくすっぽ」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア あたりまえに      イ じゅうぶんに      ウ わずかに      エ ふつうに

問十 ——— 線⑩ 「親不孝」と反対の意味をもつ言葉で、正しく漢字で記されているものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 親高孝      イ 親孝考      ウ 親孝行      エ 親行孝

問十一——線⑪「理由のわからない居ごちの悪さがあった。」とありますが、「理由のわからない居ごちの悪さ」の説明として最も適当と考えられるものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 背の高い人の言葉をとてもおそろしく感じて、ほかにだれも助けてくれる人もいなかったために、早くその場から逃げたくなっている「ぼく」の不安な気持ちを表している。

イ 背の高い人が言ったことの意味がよくわからず、たがいの家のつながりも謎めいていたために、うまく自分の言葉で反応できない「ぼく」のもどかしい気持ちを表している。

ウ 背の高い人の言葉をすぐには理解できなかったので、好奇心のおもむくままに、いろいろな質問をしたという欲求にかられている「ぼく」の積極的な気持ちを表している。

エ 背の高い人がくり返し話しかけてくれたおかげで、それぞれの家族の様子がよくわかり、やっと不思議な点が解消できたことに対する「ぼく」の感謝の気持ちを表している。

問十二——線⑫「硬直していた最大の理由は二人の年配女性の弔問客もたらしたものだ。」とありますが、「硬直した」と似たような意味で、たとえを用いてこの場面の様子を説明している部分を、Ⅱの文中から四十字以上四十五字以内でぬき出し、その初めと終わりの四字を答えなさい。

問十三——線⑬「父の死によって自分には異母兄弟が沢山いる、ということを知った。」とありますが、「ぼく」の兄弟の説明としてあてはまらないものを、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア いっしょに暮らしていた長兄は先妻が生んだ子どもであった。

イ いっしょに暮らしたことはない兄や姉たちがよそに何人かいた。

ウ 全部の兄弟姉妹の中で「ぼく」の位置は下から二番目にあたる。

エ 「ぼく」の兄弟姉妹が二つに分かれていた原因は長兄にあった。

問十四——線⑭「ぼくのすぐ上の兄は号泣していた。どうしてそんなに悲しいのかぼくにはよく分からなかった。」とありますが、「よく分からなかった」のはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「ぼく」にとって父は、言葉を交わすこともできないほど怖い存在であり、父が死んでも激しく心が痛むことはなかったから。

イ 「ぼく」にとって父は、「ぼく」たち家族といっしょに生活をしていなかった人であり、むしろ他人も同然だと思っていたから。

ウ 「ぼく」にとって父は、謎だらけのよくわからない存在であり、この人が本当に自分たちの父なのか疑問に思っていたから。

エ 「ぼく」にとって父は、怖いときもあり優しいときもある存在であり、どのように接したらいいのかよくわからなかったから。

問五 Aさん・Bさん・Cさんの三人が、**I**・**II**・**III**の文章について話し合っています。次の会話を読んで、後の1～5の問いに答えなさい。

Aさん 読んでみるとわかるのですが、**I**の文章は小説です。**II**の文章も小説です。**III**の文章は随筆です。**III**は**I**や**II**とはちがって、おそらく事実かそれに近いことを思い起こしている内容です。

Bさん 読んでいて、まず父の死の季節がいつなのかという点が気になりました。**I**は春とあります。**II**と**III**は冬です。**III**が正しいならば、おそらく冬の一月に父は亡くなるのですが、**I**は冬休みに入って近くで火事があり、正月を迎えるという筋立てであり、その後父の死の場面になります。**II**は本文の前に秋の学芸会があり、「秋が過ぎ、冬になると」という流れで、父が亡くなる場面につながります。小説はそれまでのストーリーの展開や人物の設定によって、同じ場面でも作品により季節や年齢が異なることはあるでしょうね。

Cさん 確かに**III**で「一月のひどく寒い日」に父の葬儀が行われたとあり、それを考えると**I**よりも**II**のほうが事実に近いのでしょうか、**I**では「**A**」という明るくおだやかな季節の中で、「突然」父が亡くなるという設定になっています。姉や兄が進学し、自分は小学六年になったという人生の節目になるときに、体調はけっしてよくなかった父が亡くなったのです。身近な人の死を経験していない主人公にとって、そのとまどいは並々ならぬものであったことを感じさせます。

Aさん **I**も**II**も作者の生い立ちや経験した出来事をもとにして書いた「自伝的小説」です。けれども、**I**と**II**は別々の作品である以上、同じ場面を取り上げた場合、作者からすればちがいはつきりさせる必要があると考えたからでしょうね。

Bさん 例えば、**I**では「兄の亭一」が女医を迎えに走っていきますが、**II**の「すぐ上の兄」は家出中であり、葬儀のときにもどってきたという設定になっています。どちらが事実かはわかりませんが、明らかに設定を変えています。

Cさん 主人公を中心に比べてみると、**I**は小学校六年生の春でおそらく四月ごろ、**II**は小学校五年生の一月十五日前後、**III**は小学校六年生の一月です。同じ場面でありながら、**I**と**II**の人物や場面のありさまは異なっています。「わたし」や「ぼく」といっても作者そのものではなく、主人公は作者によって完全につくられた存在であり、場面も**I**と**II**で意図的にちがうようにつくっているのでしょうかね。

Aさん 兄弟姉妹が何人いるのかというものはつきりしません。実際何人いたと考えられますか。

Bさん **III**にはいっしょに暮らしたことのない兄や姉とあわせて「全部で九人」とあります。**I**は長兄に似た大人の男二人、長兄・姉・兄の亭一・わたし・弟が確認できます。**II**は長兄に似ている**B**人の男、長兄・姉・すぐ上の兄・ぼく・弟が確認できます。

Cさん 一つのヒントは**III**の最終段落に「戦争帰りの長兄（異母兄弟であり、実際には三男）」とあります。これが正しいならば、長兄は三男ですから、上に男二人がいるはずですが、そうなるにとさらに姉にあたる人物がもう**C**人いると考えられます。

Aさん さらに不思議なのは、**II**に出てくる「二人の年配女性の弔問客」の存在です。「母よりもだいぶ歳は上のよう」だとありますから、このどちらかが父の「先妻」かそれに関係のある人

かもしれないと思わせる書きぶりです。また、一緒に暮らしたことがない姉にあたる人物についても不明です。いずれにしてもこれだけではわかりません。主人公を取り巻く家の様子に「D」ものが感じられ、この言葉は「I」と「II」の両方の文章に用いられていますが、「II」は「二人の年配女性の弔問客」により、その雰囲気を一層強めることになっていますね。

Bさん 「III」の中で「疑問に思うことがあっても気軽に聞けないような気配、雰囲気というものがその家の周囲にあったのだ。」とあり、父が死んでから母の異なる兄弟がいることを「じわじわ知っていった」と言うのも何となくわかります。

Cさん 私も「III」の文章に注目しています。「謎の多い家」という言葉が「III」にあります。が、「異母兄弟」がいることはわかった。父に妻が二人いるのもわかった。けれども、「それはなぜ？」という問いの答えはなままだです。家族にはおいそれと聞けません。「III」の文章は身近にいなながらも近寄りがたく、何を考えているのかもよくわからない父の不可解さが強調されているように私には読めます。「ぼく」の家の「謎」をつくり出している原因は、このような不可解さをもつ父にあると言っているでしょう。死んだ父こそ一番の「謎」なのです。

Aさん 見方を変えると、「I」は父の死によってもう一つ別の家族があるという事実を知った衝撃の強さを伝えており、「II」は父の葬儀によってほんやり感じられる家族の複雑さを伝えようとしているとも言えます。

Bさん 「I」は兄の亭一と「わたし」の行動を記しながら、「わたし」のとまどっている心理について多く説明しています。一方、「II」は父と蟹を食べに行った話を入れています。これにより、父の心が読みとれない印象がさらに強まった感じがします。「II」は父の葬儀の場面が中心になっており、長兄に似た男たちと「ぼく」との出会いが明確に書かれています。「D」は「雰囲気」がより強く感じられるのは、あまり説明をしていない「I」のほうではないかと私は思います。「II」は二つの家族のつながりが、読者にある程度わかるように書かれていますから。

Cさん 「III」は父の帰宅時の子どもたちの様子と父の後ろ姿の写真を撮った話を入れています。家族の不思議さばかりでなく、「E」であった父を、冷めた視線で客観的にとらえているように読めます。家族でありながら、父に対してどことなくよそよそしさが感じられる文章です。

1 会話文中の「A・D」には本文にある言葉があたりはまります。ただし、Aは十三字で、Dは五字で、それぞれぬき出して答えなさい。

2 会話文中の「B・C」にあてはまる数字を、それぞれ漢数字で答えなさい。

3 会話文中の□ Eにあてはまる最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア やさしくてまじめな存在
- イ 厳格げんかくで無口むくちでこわい存在
- ウ 口やかましく頑固がんこな存在
- エ あらあらしく乱暴な存在

4 ———線⑮「私もⅢの文章に注目しています。」とありますが、Cさんは「Ⅲの文章」を説明しながら、「父」に対する「ぼく」をどのような点で「注目」していますか。次のア～エの中からあてはまらないものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 会話もあまりしたことのない「父」に対して、冷めた目で客観的に見ている点。
- イ 家族でありながらどこことなく「父」に対して、よそよそしさを感じている点。
- ウ 子どもとうちとけようとしない「父」に対して、怒りがこみあげてきている点。
- エ 何を考えているのかわからず近寄りがない「父」に対して、不可解に思っている点。

5 ⅠとⅡは「父の死」という同じ場面をえがきながら異なる点がみられます。異なる理由について、AさんとBさんは会話文の中でどのように言っていますか。Cさんの言う次の文を参考にして、それぞれ会話中の言葉を必ず用いて答えなさい。

〔参考〕 CさんはⅠとⅡが異なる理由を次のように言っています。

「わたし」や「ぼく」は作者そのものではなく、作者によって完全につくられた存在であり、場面も意図的にちがうようにつくっているから。

## 二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 子どもがムシンに遊んでいる。
- ② シュウカン誌を買う。
- ③ お年玉をチヨキンする。
- ④ 水がジヨウハツする。
- ⑤ 理解しようとしてツトめる。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 八百屋に行く。
- ② 水を注ぐ。
- ③ 責任を負う。
- ④ 雑多な物を整理する。

問三 次の①～④のことわざの意味を、後のア～クの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

- ① 青菜に塩
- ② 魚心あれば水心
- ③ 火中の栗を拾う
- ④ 朱しゆに交われれば赤くなる

- ア 相手が自分を好きだと、自分も相手を好きになる。
- イ あまりにかけはなれてちがいのあること。
- ウ おたがいに相手のことを思い合っている。
- エ 他人の利益のために危険をおかすこと。
- オ 元気がなくなつて、しょんぼりしてしまうこと。
- カ 急にとび出すとあぶない目にあう。
- キ 人はつき合う相手によって、よくも悪くもなる。
- ク 好意を持つと欠点も良く見えてくる。

問四 次の①～④の文の——線部の語と同じ働きをするものを、後のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 山は静かだ。

- ア あの歌は有名だ。
- イ きれいな川の流れた。
- ウ 海で泳いだ。
- エ わたしのえんぴつだ。

② これはぼくの自転車だ。

- ア 弟の食べる分をとっておく。
- イ 風の強い日もある。
- ウ この本はぼくのだ。
- エ 水の音がきこえる。

③ 紙でつくる。

- ア 朝まで眠る。
- イ 電車で行く。
- ウ ケガで休む。
- エ 学校で遊ぶ。

④ 冬はかなり寒いそうだ。

- ア とても眠そうだ。
- イ 彼はえらそうだ。
- ウ 雪が降るそうだ。
- エ 意見が割れそうだ。